

文芸・言語研究科

学生の確保 (人)	年次	定員	志願者		受験者		合格者	入学者	
			学内	学外	学内	学外		学内	学外
1年次	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	※ (—)	—	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)
3年次 編入学	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	※ (—)	—	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)
学位授与数 (人)	博士課程修了				論文博士		博士課程修士		
	修了年次定員		修了者数		授与数		授与数		
	26 (26)		16 (12)		— (1)		1 (3)		
学生の研究活動 (件)	論文・著書発表数			学会発表数			受賞・表彰等		
	51 (79)			46 (126)			1 (1)		
学生の進路 (人)		教員	企業	公務員	研究員 (学術振興会)	その他			
	修了者	7 (9)	— (—)	— (—)	5 (1)	4 (2)			
	退学者	6 (13)	— (—)	— (—)	— (1)	5 (7)			

・「学位授与数」の欄の「博士課程修士」は、中間評価の合格者数を示す。

・（ ）は前年度の数値を、※は外国人留学生を内数で示す。

1 文芸・言語研究科の活動

課程博士の修了者16名は定員の7割という高率で、過去5年を見ても修了率の高さは文系研究科のなかでは随一であり、学位授与に向けて指導の成果は着実に上がっていると言える。修了した学生が高等教育機関等の教育・研究職を直ちに得るのは難しくなっている一方、学位取得は就職のための要件との自覚が学生に備わってきたのは喜ぶべきである。

2 教員の教育業績評価の状況

本研究科教員の教育業績評価を成している基準項目は、(1)担当授業科目数および受講学生数、(2)中間評価論文合格者数および課程修了者数、等であるが、これらは従来、教員各自による自己点検という慣例に任されてきており、数値化されたデータを公表し相互検討するには至っていない。ただ、学位論文の審査体制に関わるガイドラインを作成するなど、教育体制を自意識的に明確化する努力は続けており、大きな成果を上げている。

3 自己評価と課題

本研究科の運営は、全体会議と、研究科の将来構想、人事問題・事務問題を扱う複数の個別委員会によって効率化が図られている。しかし、人文系大学院の改組再編に伴い、文芸・言語研究科／専攻の事務が複雑化したにもかかわらず、依然として専属の事務官が配置されていない点は早急に改善されるべきだろう。課題は、院生の質と量を向上させ、課程修了率を高めることに尽きるが、そのためには優秀な受験生を誘致し得る魅力ある組織にしなければならない。従来通り、広報活動としてホームページの活用、ポスターの作成などを続ける一方、すでに実行していることは、入学試験の改革である。共通外国語科目の数を2から1に減ずるなど、抜本的な改革に踏み切っただけでなく、入試の多様化を目指して（従来の2月期入試に加え）新たに7月期（推薦）入試を導入した。この年2度の入試施行は成功を収め、高い定員充足率を確保することができた。